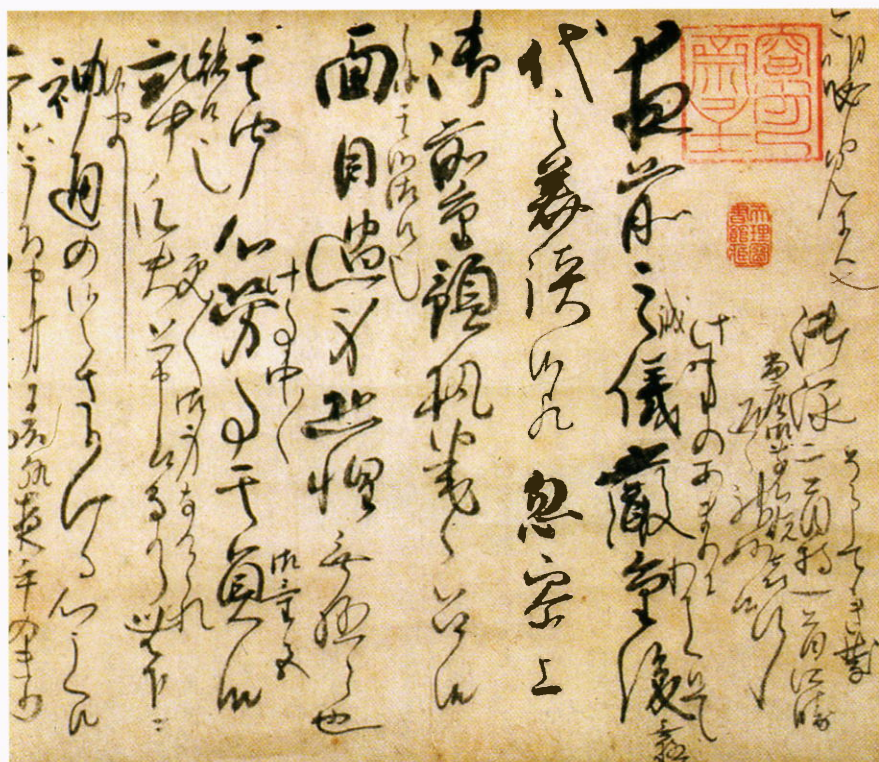


やまとの名品 天理図書館



ふじわらさだいえしゅうそく
藤原定家消息

藤原定家自筆
正治2年(1200)
縦33cm 横120cm

この書状は、『小倉百人一首』を編さんしたとされる藤原定家（一一六二—一二四一）が、正治二年（一二〇〇）十月一日、三十九歳の折、妻の弟であり、後に太政大臣として栄華を極める藤原公経に宛てた書簡です。

正治二年は、前年には鎌倉幕府の初代将軍源頼朝が没し、京では後鳥羽上皇が院政をしいており、政治はまだまだ不安定な状況でした。

和歌の世界でも、藤原俊成・定家父子による新風の御子左家は、保守的歌風の六条家と、和歌宗家の座をめぐって激しく争っており、その地位は決して万全ではなかったのです。

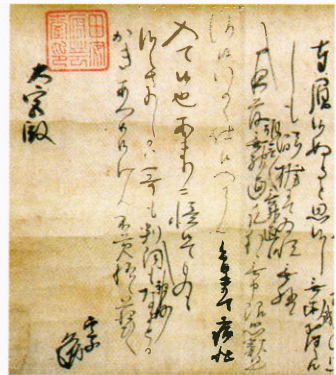
そんな中、定家は六条家の策略により歌会から外されていましたが、この年、父俊成による上皇への直訴によって加入が認められたばかりでした。

本書簡には、前夜に開かれた上皇の歌会での定家の思いが、同席した公経へ向けて記されています。急に書記の役を命じられて身にあまる光栄だと恐縮していること。そして、折角の機会にもかかわらず、自分としては満足のいく和歌を作れなかったことを悔やんでいることなどです。

それに対して公経は、定家筆の行間に「そんなことはないですよ」「他の人の作品も大したも

のはありませんでしたよ」と慰めの言葉を書き加えて送り返すのでした。

このように本書簡は、本音で語り合う二人の交情の深さを窺い知ることができる点にも、定家の和歌に対する真摯な態度や、歌作への不安な内心を窺い知ることができる好資料です。



（天理図書館 佐上圭太）